

# 吉坂峠

丹後街道

きんごうかいどう

丹後と若狭を結ぶ西の要衝、吉坂峠は新しい歴史を生み出す異文化との十字路でもあった。

「巽に高き青葉山  
(中略)  
風に袂をなぶらせて  
姐さんかむり草履がけ  
若狭少女は裾かけ  
吉坂峠 足ばやに  
浜へ出てゆく 一筋道」

明治末期、舞鶴の詩人であった筒井重坡が「春の風」の中で詠った吉坂峠は舞鶴湾と若狭の霊峰・青葉山に通じる峠。敦賀を起点として若狭を横断し丹後へ通じる丹後街道(別称 若狭街道)の西の要衝でもありました。また、丹後半島や若狭一帯は、古来、海を舞台に活躍した海人の本拠地。海の向こうから様々な文明や文物を受け入れてきた地域です。

●往時水池施設

## 霊峰・青葉山を見上げる 国境の峠に住んだ「木津の神」

京都府と福井県の県境にそびえる青葉山。今回訪ねた吉坂峠は、古代より聖なる山として崇められてきた青葉山へのルートであると同時に、丹後と若狭の国境でした。その地名は、「木津庄に通じる峠の意味で『木津坂』と呼んでいたものが、転じて『吉坂』となった」といわれていますが、旧村落にはもうひとつの伝承が残っています。それは、「崇神天皇の頃、木津の神という神様が神並みの森(現在のクレ谷の入口、国道27号線付近)にいて、水田や陸田を開き人々に農業のやり方を教えた。その神功を尊び、御名に因んで『木津の里』というようになった」というものです。

「水田や陸田を開く」ということは、稲作のための開墾や農業指導と理解してよいでしょう。稲作以前の社会にとっては大変な先進技術であったはず。吉坂に伝わる「木津の神」とはどのような人々だったのでしょうか。

※江戸時代に書かれた地誌「稚狭考」による。木津庄は福井県高浜市の古称。



●稚狭考(わかさこう)

## 稲作文化を伝えた渡来人と 彼らを受け入れた古代の吉坂

同時代の記録として『阿良須神社由緒記(舞鶴市小倉)』には次のような内容が記されています。

「第10代の崇神天皇の御世、青葉山に『陸耳御笠』と『匹女』を頭とする『土蜘蛛』が棲みつき、人々を苦しめていたため、朝廷は丹波道主命を派遣して討伐に当たさせた」

土蜘蛛というのは蝦夷などの先住民はじめ、朝廷に従わなかった土着の民(旧勢力)のことですが、民俗学者の谷川健一氏は、土蜘蛛の首領とされる「陸耳御笠」を「南方からの渡来人」とする説を唱えました。ここから、同時代吉坂に住んでいたとされる「木津の神」もまた、稲作文化を持った渡来人であったのではないかと推察がごく自然に浮かんできます。

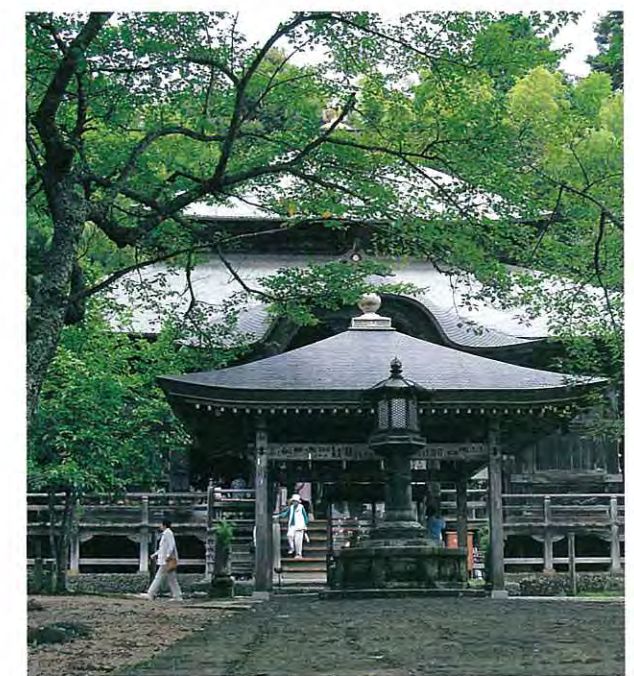
つまり、大和朝廷にとっては従属しない「土蜘蛛」であるため、征伐の対象であったとされた人々が吉坂付近まで入り込み(逃げ込み?)、そこで自分たちの持っていた農業技術(稲作文化)を伝え、繁栄をもたらした。吉坂の人々は素



●吉坂峠

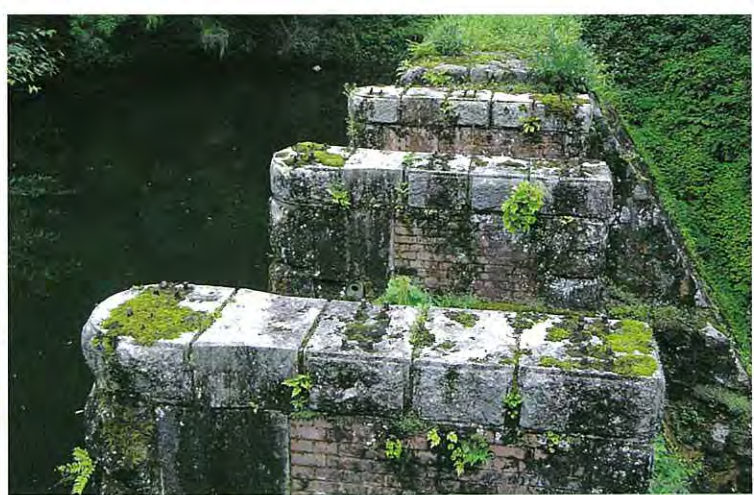


●五老スカイタワーより青葉山(中央奥)を望む



●青葉山の中腹にある名刹・松尾寺

中国から渡来した威光上人が青葉山中の松の大木の下で修行中に馬頭観音像を感得したことをきっかけに、慶雲5年(708年)にこの松の木の下に草庵を結び、観音像を安置したのが創始とされる由緒ある寺。国宝の普賢延命像はじめ多くの文化財を有する西国霊場第29番の札所。



●桂貯水池施設(与保呂水源池)  
海軍の艦艇補給用水確保のため、明治時代に造られた「舞鶴旧鎮守府水道施設」の一部。この桂貯水池施設は平成13年に京都府指定有形文化財に指定された。

直に彼らに学び、「神」として感謝することを忘れなかった——と。古来、若狭や丹後といった地方は海人の本拠であったところ。海に向こうから来た異文化に拒絶反応を起こすことなく、積極的に取り入れていこうとする先進性を持ち合わせた人々であったに違いありません。

「鬼」として退治されたもうひとつの異人伝説

青葉山の西・大浦半島の多禰寺に伝わる『多禰寺縁起』に、吉坂の言い伝えの続編とも言うべき記述がありました。土蜘蛛討伐から半世紀以上経った用明天皇の時代(7世紀半ば)に、三上ヶ嶽(現在の大江山)の「鬼」を討伐す

るため再び丹波に官軍が派遣されたというのです。『丹後風土記残欠』によれば、大江山はその昔、追っ手を逃れた陸耳御笠が逃げ込んだとされる所です。古代、土蜘蛛と呼ばれた人々と同様、従属を良しとしない人々が棲み(同族とみる説も)、時代が下って「鬼」と呼ばれるようになっていたのかもしれない。

鬼の妖力に手こずった將軍の麻呂子親王(聖徳太子の異母弟)は、自ら七体の薬師如来像を彫って、「鬼を討ち果たせたならこの薬師如来像を祀って丹後に七寺を開く」ことを誓います。その加護あって親王は勝利を治め、助命を乞う鬼達に「薬師如来像を安置する七寺のための土地を一夜のうちに開くなら、命だけは助けよう」と申し渡しました。喜んだ鬼達は勇んで七寺の土地を開墾した後、丹後半島先端のある岩に封じられたということです。



●舞鶴赤レンガ倉庫群  
港の周辺を中心に、市内には100を超える赤レンガの建物が今も現存する舞鶴。そのたゞまいは街の風景に溶け込み、見る者に懐かしさと安らぎを感じさせる。単なる保存にとどまらず、整備・再利用にも力を入れている。



●指揮所跡(内部)

戦国時代、武田氏と一色氏の合戦の舞台となった吉坂峠

時代が下り、戦国の世ともなると、奈良・平安時代と両国の特産品や年貢などを都へ運ぶ道であった吉坂峠も、隣り合う勢力がしのぎを削る戦乱の舞台となりました。若狭の守護大名・武田氏と丹後の守護大名・一色氏は数々の因縁を持つ宿敵の間柄。幾度となく互いの領土を越えての激しい攻防を繰り返し、いかにしてその勢力圏を塗り替えるかにエネルギーを費やしました。

若狭の戦記『高浜一斑』には、丹後・泉源寺城の大島但馬守、栗屋丹後守と若狭高浜城主逸見駿河守がここ吉坂峠で戦いを繰り広げ、逸見氏の武将長野弥助が丹後方の矢野悪太郎を一刀両断したのを見て、丹後方は恐れをなして退却したことが記されています。

吉坂峠に再び穏やかな空気が訪れるのは江戸時代以降。峠近くには番所(関所)が置かれていましたが、出入りはさほど厳しいものではなかったようで、人々は馬の背や自らの背に荷物を乗せて頻りに峠を往来しました。



●青葉トンネル(吉坂峠)



●地下弾薬庫跡

港を地域おこしのシンボルに新しい歴史を生み出す海人の末裔たち

峠から続く舞鶴港は、日本海の荒波を受けることなく安全に入港・接岸できる「天然の良港」として知られた港で、安土桃山時代には細川氏の城下町として、また、江戸時代には北前船の寄港地として発展してきました。明治期には海軍の鎮守府が設置されたことから軍港として発展、第二次世界大戦後は引き揚げ港としての大役を果たしたことで有名です。

その後、京阪神と日本海の物流をつなぐ商港として発展を続けてきた舞鶴港は、近年、多目的国際ターミナルをめざしアクセスの整備(神戸・大阪・京都から約1時間半)が一挙に進み、物流拠点としてのポテンシャルが大きくアップしています。また5万トンクラスの客船が入港できる新しい埠頭の建設、臨港道路の建設や緑地整備をはじめ、各種の港湾施設の整備も並行して行われています。

海人の末裔ともいべきこの地の人たちにとってもなじみ深い港は、古代より「人・モノ・情報」の行き交う場であり、活気の源でもあった場所。港のインフラ整備は、舞鶴の活性化にも大きな意味をもたらすことでしょう。

(参考資料)  
『まいづる 田辺 道しるべ』安田 重晴著  
『舞鶴の近代化遺産』舞鶴市、舞鶴市教育委員会

●吉坂への道●  
鉄道の開通によっていったんは往来が激減したが、その後、吉坂堡壘砲台が築かれたため戦車が離合できる道幅に再整備された。山側には石積みの壁が残る。現在は国道27号線の青葉トンネル開通により、県境の物流もスムーズとなった。